書評

最少人口の400人の村。過疎高齢化の先進地域だ人、地方の取り組みに興味ある人に一読を勧めたい。

美意識のありか
万葉のこころが育てた感性

樹下龍児・著

著者は日本古来の伝統文様から独自の文様デザインを数多く創り出してきた。その創作活動を通じて、日本人の美意識の源を探り続けてきている。

その探求の具体的な方法として400点もの明治、大正、昭和時代初期の、近代教科書に書かれた挿絵と文章を集め、脈々と受け継がれてきた日本人独自の感性を解き明かす。

日本の四季は近年の気象変動により、以前に比べてその変化が乏しくなっているといわれている。それに伴い、また情報化が進む中で、日本人独自の感性が老若男女を問わず希薄になってきていると指摘される。それでも、自然界にあるさまざまな風物、虫や鳥の形や声、風が運ぶ音や日々の移り変わる景色の妙、月が映し出す、幽玄の味わいなどの感覚を、完全に失ってはいないだろう、と著者は言う。

本書を通じて、世界的に見ても独特な日本人の美的感性がどのように次世代に伝え続けられてきたのかを垣間見ることができる。著者は日本人の美意識を「巡りくる春・夏・秋・冬と、とりわけ季節の変わり目の繊細な風趣に想いを寄せ、『もののあわれ』へと昇華させてきた」と表現している。

日本人の洗練された美意識を見直してみる、そんなきっかけを与えてくれる本である。(弦書房、2000円)

地域の食をブランドにする!

金丸弘美・著

副題は「食のテキストを作ろう」。新たな観光資源と持続的な地域経済を生む方法として、地域の食に付加価値を付けて都市部に売り込む、「食のブランド化」が注目されている。農産物を売り出したい、ブランドにしたい、食育を進めたい、などの要望があったときに勧めているのが食のテキスト化だという。

ではテキスト化とはどうすることなのか。著者はそれを「農産物、海産物などの履歴を作ること」と明確に定義する。環境や品種、歴史、文化、栽培法、栽培の履歴、量、栄養価、食べ方などを調べ特徴を明確にすることだ。

テキスト化した後にするのが、バイヤーや消費者、マスコミ向けのプロモーションで、このために参加型ワークショップの開催を提案。本書はテキスト化とプロモーションの方法を丁寧に紹介する。(岩波ブックレット、620円)

東京に「いのちの森」を!

宮脇昭・著

2020年は東京五輪・パラリンピックの年だ。空前の大工事が行われ、東京への人口集中がやまない現実は、自然環境に決定的なダメージを与える、と著者は主張する。辛うじて緑が残る大都市・東京だが、その緑はどんどん減少している。

著者は世界的に著名な植物生態学者。その人が「千年先に残る、本物の緑の都市づくり」のため、〝いのちの森〟づくりに生涯を懸け、実現のための提言をしている。

本書で著者は、全ての日本国民の命と国土を、さらに地球と全ての人類の命と健全な生活、文化、遺伝子を守ることこそ、次の氷河期が来るまで9000年残る、生きている緑の、トータルなシステムであると強調する。「ふるさとの森を、ふるさとの木で!」を国民運動にしていこうと呼び掛ける本書に賛同する。(藤原書店、1600円)

歴史街道
地域土着スーパーやまとの教訓

圧倒される

京都・祇園祭の山鉾(やまぼこ)町は四条室町を中心に集まっていますが、中でも綾小路通森町の杉本家は、山鉾町最大規模で最古の町家の一つです。

当家初代の新八は、1704(宝永元)年、伊勢国(現在の三重県)生まれ。その魅力に追ら重厚感に指定は、観光を体現す

名勝に坪庭にはめられ す。杉本 目まで西 め直門徒 仏間・仏

町家』を西川孟撮町家の頂

おず道書店

売れ筋情報

三省堂書店 農水省売店

❶TAGの正体